

② 加納夏雄死去

明治三十一年二月三日、彫金科教授加納夏雄が死去した。七十一歳。五日、谷中墓地に埋葬。本校教員、生徒も多数葬儀に参列した。

夏雄は文政十一年に山城国に生まれ、天保十一年に大月派金工家池田孝寿に入門するとともに円山・四条派の大家中島来章に画を学び、嘉永七年江戸に出て彫金の業を営んだ。明治二年宮内省御太刀御用金具彫刻を命ぜられ、また、同年より造幣局の貨幣極印製作に従事。同十四年第二回内国勸業博覧会の審査官をつとめ、「鯉魚図額」を出品して妙技一等賞受賞。同二十三年の第三回博覧会でも審査官をつとめ、「千羽鶴図花瓶」を出品して前回同様の賞を受け、同二十八年の第四回博覧会では、「松鶴図額」を出品して妙技二等賞を受け、その間、弟子たちとともに多数の小品を製作した。円山・四条派の画法を基礎にして鋭意写生につとめ、独自の意匠を片切彫りの彫金に用いて金工に一生面を切り開き、名声高く、明治二十三年、本校に起用された年に帝室技芸員に任命されている。本校では彫金の参考標本（手板）を数多く作り、清水南山の回想記（48頁参照）が示すように生徒を懇切に指導した。後任には高弟香川勝広が起用された。

なお、夏雄歿後間もなく『読売新聞』（明治三十一年二月七日〜同月十一日）に掲載された「彫刻家故加納夏雄氏逸話」の左記の一節によれば、夏雄は明治三十一年当時反岡倉派ないし本校改革派が主張していた美術・工芸分離論に強く反対していた様子である。

◎ 死に臨んで海野勝珉氏を勵む

海野勝珉氏ハ夏雄が晩年の門下生なり、手腕卓越大に將來の彫刻界に望あり、夏雄死に臨んで私に勝珉を呼び慨然語て曰く「彫刻ハ本朝の美術なり、而して美術と工藝との區域ハ素より工人の手腕による、近時西洋に熱するの説起りて往々斯道を傷け延ひて後進子弟を誤らんとす、吾今瞑せば足下に非ずして誰か又此邪説を破る者あらんや、足下請ふ奮勵せよ」と勝珉涕泣して師が最後の教を聴く

③ 依囑製作に関する嘆願書草稿

岡倉校長辭職直前に作成された文書の草稿。教官個人の依囑製作もできるだけ教室内で行わせ、生徒に見学の便を与えたいという内容である。制約の多い学校教育制度のもとで美術の教育の特殊性を損うことなく教育効果をあげようとする姿勢が感じられる。原文は東京美術学校名入野紙に毛筆で記されており、所々に訂正が加えられている。（ ）は削除された部分である。

明治三十一年三月十六日

庶務掛

校長

教場掛

會計掛

本校生徒實地製作ニ就テハ從來種々計畫致居候得トモ經費ノ不足教室ノ狹隘等ニテ未タ完全ノ設備至ラス漸ク依囑製作ニ由リ其端